

民俗篇

1 婚礼と葬礼

1-1 婚礼

昔の結婚は家と家、さらにはジミョウ（註1）やクミアイ（註2）などの部落の結びつきが重くみられ、ハシワタシ、ハシカケ、ネドリなどと呼ばれる経験や人とのつながりの多い人が男女のきっかけを作り、両家の事情を聞き、見合い、結婚へと進めた。

婚礼は、ヨメイリ、ヨメドリ、オメデタ、また、婿養子の場合はムコイリなどと言われ、婚礼はイセキ（長男）あるいはイセキムスメ（長女）だけで、次子以下は適当に省略されたようです。

（註1） ジワケ（地分け）、ジルイ（地類）とも言い、昔の本家、分家の関係で、土地を分け合った家々である。これらの家々ではジミョウヅキアイと呼ばれる生活上の助け合いをし、この付き合いは永久的だとされた。多くは同姓で住居も近く、宗派もほとんど同じである。ジミョウヅキアイの内容は婚礼、葬礼、出産、節句、病気、年忌、屋根葺き替え、家普請、農繁期の協力などである。

（註2） 地縁近隣関係に基づく組織で、必ずしも同姓ではなく、ジミョウヅキアイよりはやや軽い付き合いであるが、相互扶助の内容はほとんど同じである。

◇モライウケ

婚礼の日の朝、婿は仲人、血縁の濃い親戚、ジミョウなど奇数の人数で嫁の家へ迎えに行きました。嫁の家ではタチイブルマイという膳を用意して酒食でもてなしました。婿はジミョウが付いて嫁の近所の家を廻り、オヒロメをして一足先に家に帰りました。

婚礼の前に嫁はジミョウの主婦に連れられて長年世話になったクミアイや講中の人達にお別れの挨拶に行きました。これはデワカレと言いました。

◇嫁入り行列

モライウケの儀式が済むと、嫁側では仲人、親戚、ジミョウなど奇数の人たちで嫁入り道具と共に婿の家に向かいました。通婚圏の狭かった昔は徒歩であった。行列の先頭は両家の仲人の男二人、婿方の親戚、仲人の女二人にはさまれた花嫁、ツノダルとハサミバコを担いだ人、嫁方の親戚が続いた。その後にオトモが嫁入り道具をかついだり、荷車で運びました。オトモは嫁方の近所の青年で、お祝儀が出るので喜んでなったようです。長後では順番にオトモをしたようです。

◇入家式

婿方では、ジミョウが高張提灯を持って途中まで花嫁を迎えに出ました。婿の家の門口の両側ではタイマツモチの男女の子ども（男蝶・女蝶）が藁束を焚き、花嫁は仲人に傘をさしかけてもらって松明の間を通過して婿の家に入った。傘をさすのは「屋根棟を見ると一生その家にいられない」という俗言が長後に伝わっている。また、タイマツモチの男女はジミョウの中から両親の揃った子どもが選ばれた。

◇祝宴

嫁はまず納戸に入って休み、その後ツキアイと言って婿方の仲人、ジミョウ、親兄弟に挨拶をした。

祝宴のはじめには、オチツキのボタモチが出され、列席者はこれを一口でも食べなければならない。おそばに長くいるという意味で蕎麦を出す場合もあった。

三々九度はアイサカヅキとも呼ばれ、男蝶、女蝶の子どもが一つの盃に同時に注ぎ合わせて行われた。

祝宴の料理には必ず蛤の吸い物が付き、最後にはお赤飯を高くよそったオタカモリが出て、婿も嫁も一箸でも食べなければならなかった。夫婦となる男女が一つの器から物を食べるという大切な儀礼と言われている。

この宴席の司会進行はジミョウが担い、婿と嫁の両親は出ないのが習わしであった。

◇ツギメ

嫁は祝宴の席を中座して、ジミョウの女の人に連れられて氏神や寺、ジミョウ、講中、近隣へ挨拶廻りをした。連れて歩く人をハナビキと言い、挨拶廻りには半紙一帖にお茶を添えて持って行った。お茶の木は植替えが出来ないので、嫁が目出度く家に落ち着くようにとの意味があった。長後あたりでは氏神へオサングを供えたと言う。氏神や寺への挨拶廻りは村の一員になる承認を得るためのなすべき事であった。

◇アトザシキ

祝宴の終わった後、宴の進行役を担ってもらったジミョウや働いてもらった人たちへの感謝と慰労の宴席で、家族が接待をした。

◇オヤノシンキャク

婚礼の終わった数日後、新夫婦は仲人と婿方の両親に付き添われ嫁の実家へ行った。これが舅、姑と嫁の両親との正式な顔合わせになり、嫁は一晩か二晩実家に泊まり、両親、嫁方の仲人に付き添われて帰った。

◇結婚年齢と通婚圏

結婚年齢は男なら 26 歳～30 歳、女なら 21 歳～25 歳というのが藤沢だけでなく、県内の平均的な年齢であった。結婚適齢として認められるのは男なら村の一員として共同生活上の責任を負い得ることが第一条件であった。女の場合は家事全般の他、機織りまで出来なければ一人前と言われず、行儀見習いとして女中奉公するのが普通であった。それが済まないうちは嫁にやらぬ、もらわぬというくらいであった。

通婚圏に関して藤沢北部には「北を向くな、南を向いて行け」とか「嫁に行くなら南へころべ」という習わしがある程で、北の方から来る者は多かったが、北の方へ行く者は少なかった。南は水利が開け、水田があって米を作るのが出来たのに対し、北部は芋や麦を常食としなければならず、畑地が多くて苦勞するというのである。

1-2 葬礼

葬礼を藤沢では一般にオトムライと呼んでいる。結婚式のシュウギに対してブシュウギとも言う。

◇サタ

不幸があると、ジミョウの人が必ず二人連れで寺、親戚、近所に知らせに行った。長後では、部落内の通知はジミョウが部落長に知らせ、部落長から各組に知らせた。重い病人のいる家から二人使いが来ると、遠くから見ただけで不幸を知る事から、普段は二人で何かを知らせに行くのは嫌った。

サタに来た人に対して通知を受けた家では「茶碗と箸を持たせなくてはいけない」とご飯を出すのが習わしであった。

◇タイヤク

土葬の場合、穴掘人は欠くことの出来ない大役でした。喪のないクミや講中から二人から四人を輪番制で出しました。穴掘り人は妻帯者に限られ、妊婦や病人がいると順番が変更された。穴掘り当番の「穴番帳」「穴掘帳」などの帳面があり、順番に公平に行われていた。

◇葬具作り

クミアイの男の人の仕事で、棺、位牌、塔婆、天蓋、仮門、龍頭、招き、辻蠟、死花花など葬礼に使う全ての物でした。

◇出棺

僧侶が読経をしている間、参列者一同がご飯に味噌汁をかけて一本箸で一口ずつ食べ、生きている者と死者とのクイワカレの儀式を行なった。

読経、会葬者の焼香がすむと、普段の出入口とは違う縁側から出棺された。この時、近親者は藁草履をはいて棺に続いて縁側から出、縁側の外に作られた仮門も棺に続いてくぐった。庭に降りた棺を真ん中に近親者は左回りに三回廻り、葬列を組んで墓地へと向かった。

仮門は埋葬の時に壊して一緒に埋めてしまった。仮門は穢れた世界との境を意味し、埋める事によって、死者の霊が帰って来ないようにしたのではないかとされている。

◇野辺送り

棺の上には天蓋（太陽から死の穢れを遮断する）をかざし、講中の人たちが念仏、またはお題目を唱和し、鉦や太鼓を鳴らしながら墓地へと運んだ。位牌、供膳、杖など重要な物は血縁の濃い者が持ち、位牌を持つ者が相続者の証であった。葬列には提灯、龍頭や招き、死花花などの飾りが加わり、墓地までの道の辻々には辻蠟を立て、死者の魂が迷わないようにと灯をともした。野辺送りの道は往きと帰りを違え、死霊が後に戻ることを避ける呪法の一つであるとおもわれる。

◇野帰り

喪家の門口には臼を北向きにし、横に倒して塩を盛った皿をのせ、手拭い、水を張った盥が置かれ、墓地から帰った人たちはそこで浄めて家に入った。

◇キヨメの本膳

僧侶、穴掘り、家族、親戚などが席に付き、精進料理の本膳が出された。材料

の調達、料理、接待などはクミアイの主婦たちが担った。

◇引出物

もち米、小豆を使ってモチマンジュウを作った。業者の指示に従って、材料の調達、小豆を煮たり、マンジュウを蒸したり、クミアイの人たちが一晩中かかって用意した。

◇忌中払い

クミアイの人たちをはじめ、葬儀を手伝ってもらった人たちへの感謝とねぎらいの膳で、喪家の家族が接待をした。

資料 「藤沢市史 7 文化遺産民族編」
「上高倉のむかし」

2 長後地区で使われた言葉集

五十音	方言	標準語又は解釈	方言	標準語又は解釈
あ	あかす	教える	あせー	浅い
	あかせろ	教える	あた	仕返し
	あかなす	トマト	あたーこく	復讐する
	あかりい	明るい	あったけー	暖かい
	あくどい	くどくどしい	あなっこ	穴
	あさづくり	朝食前作業	あなぼこ	穴
	あすけら	あそこの所	あのなーよ	あのねー
	あすこ	あそこ	あめー	甘い
	あすこんとこ	あそこの所	ありがてー	有難い
	あすぶ	遊ぶ		
い	いゝからかん	良い加減(悪意を含む)	いっぺえ	一杯、沢山
	いゝきび	痛快	いってんべー	行ってみよう
	いゝやんばい	良い天気	いてー	痛い
	いきっこねー	絶対に行かない意	いなぶら	稲むら
	いきなりざまにする	放任する	いねい	居ない
	いきれる	醗酵(はっこう)	いびりつけ	醤油、砂糖でまぶした団子
	いくべー	行こう	いめーましい	腹だたい
	いけぞんざい	不丁寧	いやしんぼう	食いしんぼう
	いたっぺら	板片	いらねー	いらない
	いちっこ	わらで編んだ入れ物	いれんな	色々な
	いちまき	一族	えんぺつ	鉛筆
う	うえた	田植	うなう	耕やす
	うけとりしごと	割当仕事	うめー	上手、美味しい
	うされ	行け	うら	先端
	うさる	来る、居る	うらっかた	裏手
	うじゃっこい	蛆のように沢山という意	うるさったい	やかましい
	うすきたねい	汚い	うろ	洞
	うすのろ	のろま	うわかった	上部分
	うちぐるみ	みうち	うわっぺら	表面
	うっちゃらかす	無責任に放任する意	うんと	沢山

	うっちゃられる	捨てられる	うんときさ	沢山
	うでる	ゆでる	うんならかす	早める
え	えゝだ	あいだ(間)	えな	出産後に分泌する粘膜
	えが	栗のいが	えばる	威ばる
	えゝだ	あいだ(間)	えぶす	けむす
	えが	栗のいが	えぶる	けむる
	えてこー	猿	えぼ	いぼ
五十音	方 言	標準語又は解釈	方 言	標準語又は解釈
え	えむ	割れる	えんこ	座れ(小児語)
	えれる	入れる	えんづける	嫁がせる
	えんが	縁側		
お	おいら	俺達	おっぺちゃんこ	扁平な顔貌の悪評
	おゝまくれ	大食者	おとてー	一昨日
	おかい	おかゆ(粥)	おねえどし	同年齢
	おかぶせ	畑苗代	おぼく	麦飯
	おくんなさい	下さい	おぼんし	台所番
	おーこちる	落ちる	おまさん	お前さん
	おこさま	蚕	おめっち	君の家
	おこじょう	三時のお茶(間食)	おめっちゃ	君達
	おさまえる	おさえる	おめーら	お前たち
	おじゃん	中止、駄目	おもてい	重い
	おしれい	お白粉	おらが	私家
	おせーる	教える	おらたち	俺達
	おせー	遅い	おらっち	自分
	おそーそーさま	不十分なもてなし	おれんち	自分の家
	おたんちん	馬鹿の意	おろぬく	間引く
	おちゃらかす	からかう、冷笑する	おんどまり	これより先に行くことのできないこと
	おっぱしよる	折る		
	おっかねい	恐ろしい	おんじ	妻帯しない男
	おっけーす	押し返す	おんだす	追い出す
	おったまげる	びっくりする	おんのだ	俺のだ
	おっとし	一昨年	おんば	終生独身の女
	おっぱじめる	おゝげさに開始する意	おんばいも	古い馬鈴薯の種
	おっぱしる	走る、逃亡	おんも	芋

	おっぺす	押しつける		
か	かえー	かゆい	かったぎる	薪にする為に生木を切る意
	かがみっちょ	トカゲ	かつちらかす	粗雑に撒く意
	かこる	貯蔵	かてー	固い
	がじがじや	無計画にたゞ働く人の意	からびる	乾縮する状の意
	かたぎ	そればかりの意、例えばかたぎに燃やす	かみすり	かみそり
			からっちゃ	粗茶の意
き	きそっぱ	しその葉	きなよう	来なさい
	きつぶし	木片	きびがわるい	気持が悪い
	ぎっちり	目一杯	きもん	着物
	きてい	不思議	きゃーす	返す
	きない	来ない	きゃーる	蛙
五十音	方 言	標準語又は解釈	方 言	標準語又は解釈
き	きゃーる	帰る	きーれー	黄色
	きょうでい	兄弟	きんの一	昨日
く	ぐうたらべー	しまりのない人の意	くめんがいい	金まわりがよい
	くさくさする	あきあきする	くらんでいる	繁茂している
	くさぼっこ	草むら	くらんでくる	俄かに曇ってくる
	ぐしゃつく	湿潤	くらんでくる	俄かに急いでくる
	くずかき	落葉はき	くるり	稲や麦の脱穀に使用する連架
	くたぶれる	疲れる		
	くちい	満腹	くろ	水田のあぜ道
	くでんぐでん	くたくたに疲れる意	くろっぽ	黒斑病にかかった麦の穂
	くどい	難かしい、しつこい	くわぜんぼう	桑の梢
	くね	垣根	くんなさい	下さい
	くみえーい	組合	くんねー	くれないか
け	けいおけ	飼桶	げえもない	馬鹿々々しい
	けいば	牛馬の飼料	けつぺた	しり
	けいろ	下さい	けつめど	肛門
	けえがら	貝がら	けぶたい	けむい
	けえど	街道	けーまき	綿入の袖のある夜具
	けえる	蛙	けんつく	突然叱る

	けえる	替える	けんのうしょう	おくびょう
	けえる	帰える	けんのん	危険
こ	こえ	声	こそくり	修繕
	こいつみ	堆肥を施す意	こそくる	修繕する
	ごうはら	立腹	ごそーさ	心づかい
	こうるさってい	やかましい	ごちやまかす	不正する
	こえーい	株間	こづけー	小使、小遣
	こぎる	水田の荒らしろかき	こっちこう	此方へ来い
	こくそ	蚕のふん	ごっちょう	厄介
	こぐり	くぐり戸	ごっちょうきる	厄介であった 手間がかかる
	こける	細まる		
	こごり	土塊	ごてー	全身
	ござっている	老朽している、腐敗している	ごてつく	混雑する
	こさっぼ	木陰の田畑	こなし	脱穀
	ござる	老朽、腐敗	こなす	脱穀、やじらう
	こしげ	腰越(地名)	ごのうがきかない	手足が思うように動かない
	ござ	赤飯を炊く時かける熱湯	こんそ	蚕のふん
	こぜんわ	細縄	ごんぶっとい	太い
	こせーる	こしらえる、造る	ごんぼう	牛蒡
五十音	方 言	標準語又は解釈	方 言	標準語又は解釈
さ	さがにし	西風	さんざっぱら	暫くの間、永い間
	さくい	ざつくばらん	さんだあら	俵の両側にあてる丸い藁ふたのこと
	さくきり	うね立て		
	さくばみち	畦道	さんばそう	田植や麦播きなど主な農作業が開始間もない頃の意(三番叟)
	さくる	うね立て		
	さーった	触った		
	さびー	寒い		
し	しおけ	漬物	しーなめー	屑繭
	しおて	霰	しのこし	なんくせ
	しきこみ	麦間へ堆肥を施す作業のこと	しばつける	水で土をこねまぜて固める意

			しばや	芝居
	しけ	十分な収穫がなかった意	しびい	渋い
	しけっぱ	水はけの悪い畑	しふく	修理維持
	しっかり	沢山	じめう	地頭、本家
	しとつきり	一時	しゃかん	左官
	しとっぱしり	ちょっと行く	しゃつけい	冷めたい
	しなす	糺(しいな)	じょうぐち	間口
す	すえなえ	予備苗	ずつなし	なまける
	すがい	わらで作った稲や麦を束ねるもの	ずつなしもの	なまけ者
			すっぽる	投げる意
	すくねー	少い	すなっぱ	砂地
	すくも	穂切りのまじったゴミの意	すぼけ	稲や麦などが最初良かった生育が後になって急に悪くなってしまった意
	すける	協力する		
	すけろ	協力せよ		
	ずし	天井裏	ずりー	ゆるい
	ずっこける	結び目がゆるんでほぐれる	ずる	すべる
	すつとびあるく	放蕩する	ずるい	ゆるい
	すつとびだす	放蕩す		
せ	ぜいご	近在	せえふ	財布
	せえから	それから	せびる	他人の畑との境界を悪意で拡張する意
	せえばし	さいばし		
	せなご	兄	ぜーもく	材木
	ぜね	銭	せんみ	蟬
	ぜねつくび	着物の袴が折れたまま着ること		
五十音	方 言	標準語又は解釈	方 言	標準語又は解釈
そ	そうけ	そうか	そらっぷく	他を向く
	そうじゃあんめ	そうではなからう	そりゃー	それは
	そうだんべ	そうであろう	ぞんぜい	粗末
	ぞーさもない	たいしたことがない	そんで	それで、そして
	そっくら	残らず全部、よく似ている	そんなら	それなら

た	たけずっぽ	竹筒	たんねい	たりない、不足
	たっぺ	霜柱	だんなびより	夜間だけ雨が降って昼間になると晴れる天候のこと(旦那日和)
	たてまい	棟上げ		
	たーら	俵		
	たんと	沢山	だんべー	～であろう
ち	ちっちえい	小さい	ちよつくり	ちよつと
	ちっとべー	ほんの少し	ちよつくら	ちよつと
	ちぶくれる	ふくれ面をする意	ちよつけいがはやい	手際が早い
	ちよいのま	ちよつとの間	ちよろつと	ちらつと
つ	ついたし	継ぎたす、追加	つまじる	つねる
	つおい	強い	つよ	露
	つかめーる	捕える	つよ	つえ
	つくて	堆肥を細くしたもの	づるい	軟かい
	つくねる	ゴミなどかき寄せ固める意、例えば、つくねて持つ		
て	てあし	餅をつく時の補助役	でえふく	大福もち
	でいく	大工	てーこ	太鼓
	でいこ	大根	てーし	亭主
	ていへん	大変	でっけい	大きい
	ていら	平	でん	つもり、例えば、いつものでん＝いつものつもり
	でえこん	大根		
	てえげー	大概	てんぐるま	肩車
	でえどこ	台所	てんで	皆無
	でえどころ	台所		
と	どうご	道具	とむれー	葬式
	とえー	遠い	とつけーる	取り換える
	どけー	どこえ	とんぼぐち	玄関先
	どてっぽ	土堤	とんもろこし	とうもろこし
	どどめ	桑の実		

五十音	方 言	標準語又は解釈	方 言	標準語又は解釈
な	なあよ	あのよ	なをった	弟が亡兄に代って家を継ぐ意
	なぐりしごと	おうぎっぱなしごと		
	なげー	長い	なをる	弟が亡兄に代って家を継ぐ意
に	にげー	にがい	にわしぶ	霜を防ぐため庭に敷く藁
ぬ	ぬくてえ	暖かい	ぬりい	ぬるい
ね	ねー	無い	ねべー	寝ましょう
	ねー	苗	ねーま	苗代
	ねえる	煮える	ねべー	寝ましょう
	ねえしょう	ないしょう	ねーま	苗代
	ねーた	煮えた	ねーま	苗代
	ねーふ	ナイフ	ねんじん	人参
の	のたくる	のたくり廻る	のらんくらん	なまけものゝこと
	のっかる	乗る	のれー	のろい
	のっける	乗せる	のんのさま	仏さま、お月さま
	のーのーさん	お月さま	のんのさん	お月さま
	のめっこい	なめらか		
は	はえー	早い	はこぼこ	白墨
	はがち	むかで	ばっかり	ばかり
	ばくめし	麦飯	はなっぱ	先端、例えば樹木の先端など
	はーこう	早く来い		
ひ	ひあし	灰	ひののき	日中
	ひっちかられる	しかられる	ひんぬく	抜く
	ひでー	ひどい		
ふ	ふけえー	深い	ふんだくる	奪う

	ぶつつある	座る	ぶんどる	奪う
	ふりー	古い	ぶんなぐる	なぐる
	ふるしき	風呂敷	ぶんまける	容器からあける
	ふんじばる	縛る		
へ	べ	だろう、あろう	へえ	蠅
	へえ	灰		
五十音	方 言	標準語又は解釈	方 言	標準語又は解釈
ほ	ほきだす	吐き出す	ぼさっかぶ	草むら
	ほきる	生育する	ほせー	細い
	ぼさっか	笹やぶ	ぼっこわす	打壊す
ま	まじい	まずい	ままっこ	子供
	まつつぐ	真直	まみや	まゆ
	まっと	もっと	まりー	円い
	まねーた	まないた		
み	みいしみる	真面目に行動する意	みしろ	薙(むしろ)
	みご	稲の穂がらのこと	みっともねー	見苦しい
む	むいがら	麦わら	むる	漏る
め	めーましい	いまいましい	めっかる	見つかる
	めいやく	迷惑	めつける	見つける
	めえー	前	めつけもの	ひろいもの
	めえかけ	前だれ	めーにち	毎日
	めーかき	繭をまぶしから取ること	めめず	みみず
	めくしゃ	目のたぐれている状の意	めれんす	メリンス
も	もこ	婿	もちぎっぺいなし	品物を粗末にする
	もこう	向う		

や	やおつり	新築の家に引越すこと	やっぱし	矢張り
	やきぴん	農家自家製のパン	やらー	あげよう
	やっけー	やっ介	やんべー	あげよう、始めよう
ゆ	ゆっくら	ゆっくり	ゆんべしがた	昨日の夕方
	ゆんべ	昨夜		
よ	よすべー	止めよう		
ら	らっきゅう	らっきょう		
れ	れえねん	来年		
わ	わけーし	若衆	わりー	悪い
	わざっと	簡略に表現する意	わりかし	割合
	わたえれ	綿入	われ	なんじ
五十音	方 言	標準語又は解釈	方 言	標準語又は解釈
ん	んめー	おいしい		

3 長後に伝わる昔話

3-1 恵母地藏の由来

渡貫治右衛門(当主歌次郎)の屋敷はずれ乾の方に慈悲深いお姿のお地藏さまが巽(タツミ=南東)向かいに立っていらっしゃいます。昔明和の頃、三年、五年と不作が続き農家も貯蔵食料が少なくなり山の芋や野草を摘み「ぞうすい」でその日を過ごすありさまでした。江戸も食糧難で毎日多くの餓死するものがあった、生まれ故郷へのがれ去る者が多かったのであります……。お百姓は「あさづくり」といってウス暗いうちから朝飯前の一仕事するのが習慣(ナラワシ)でした。ある朝、畑へ行こうと裏道へ……赤ん坊の泣き声がするので近寄ってみると母親の乳房をさぐりながら泣いています。母親をゆり起こしたが、あわれにもすでに息絶えてつめたくなっている……。当時屋敷の乾の方には椎の木の大木が屋根を葺いたような枝を張っていました。その根元のあたりは篠竹が屏風を立てたように密生していて北風をよけていましたので旅に疲れ果てた母子が昨夜からここに夜露をさけて一夜の宿としたものと思われます。ワラジの破れ具合からみても江戸から田舎へ帰る途中と思われます。田舎はドコなのか、訪ね

るところは誰なのか、持ち物を調べてもいずこの者ともわかりません。すぐに近所の人の手を借りてお寺の和尚さんに相談して自家（ウチ）の屋敷内で亡くなったのも何かの縁と自家墓地の端に葬りました。赤子は身元のわかる時節もあらうと死んだ母親に代わって養育していましたが、ついに身寄りの人も現れなかったのです……。母親が己（オノレ）の息絶えての後までも赤子に乳房を含ませていたその姿のいじらしさ、母性愛をあわれと思い近所の人々と相談してお地蔵様を建てお寺さんが「恵母（えも）地蔵」さまと名づけてお経をあげてくださいました。お地蔵様は「一ツや二ツ三や四ツう十にもたらぬおさな子が」と「和さん」の歌にもあるように、子供守って下さる佛さまです。また、「一ツ積んでは父の恩、二ツ積んでは母の思い……」でいつもお地蔵さまの慈悲心（ジヒシン）を心としてかわいそうなこの孤児を娘として育て上げ、他家へお嫁入りさせたのだそうです。お墓に残る無縁仏は名も知れぬ母親の墓標です。お地蔵さまは代々乾守りとして信仰していたものです……。ちかごろ恵母地蔵さまをイボ神さまなどと言われていますがお地蔵さまも苦笑なさることでしょう。

（明治四十年祖母チカの話）
「大山街道繁盛記」

3-2 お瀧姫さん

文化文政の頃、流行病が多くこの瀧でお茶を飲み粥をたき、眼病の者はこの水で目を洗えばたちまち快癒（ナオ）るとのことでお瀧姫さんとして、村人が信仰したのだそうです。

「大山街道繁盛記」

3-3 蛙石の由来

七ツ木神社の大鳥居前に大きな玉石があります。ちょうど蛙が座っているような形からその名があります。この石はもと、下土棚の白山さまにあったのですが、有る年の正月休みに村の若い衆が力もちをしています。三十三貫のこの石は若い衆もなかなかかつぎあげることが出来ません。そこへ遊びにきていた高倉の若い衆の中でも力自慢の沢野幸左衛門（金太郎の父）・（上原）青木又左右衛門・入内島大次郎（甚三郎祖父）・弟の床右衛門（後に渡貫庄右衛門）などと言う五六人が、その「カッコウ」のおかしさに思わず吹き出してしまった。怒ったのは土棚の若い衆

土棚「おめえさん達にかつげるのか……」

高倉「何貫ぐらいか」

土棚「三十二貫ダ……」

……力自慢の連中はムズムズしていたが……

高倉「これがかついたらオレ達にくれるか……」

土棚「いいとも、そのかわりいったん担いだらおろさずに高倉のお宮まで持って行け……。そのうちにおいらが取り返しに行くから」

高倉「よしよし面白い、もらっていくぜ」

まず幸左衛門さんが軽々とかつぎ上げて歩き出す、土棚の若い衆はその大力にあきれ顔で見送っていたが、いかに大力ぞろいでも高倉のお宮まで肩から下ろさずに行けるものか、とあとから見張って付いてくる。一方高倉の連中は今度はオレが代わるぞと肩から肩へと次々に代わりあいながら「サイカチ戸」からとうとう七ツ木神社の鳥居さきまで運んでしまった。その後、土棚からは取り返しにきたものはなかったのだそうです。これは明治初年の頃のことでした。

(古老の話より)

「大山街道繁盛記」

3-4 ネタンポの猫

中田のおどり場へ行ってね、猫が踊ったっていうんですね。その猫は、吉原俊次さんの家の猫だという話でね。吉原さんの家は、寺のネタンポ（くね境）にあるので、この部落の皆さんがネタンポとよんでいるんですよ。そこのお年寄りからも、ちょっと聞いたことがあるのですが、とても大きな猫だったてね。その猫が、猫の踊りに参加して、笛吹きだったらしいんだね。ところが、うまく笛が鳴らない、と仲間が言い出してね。

「ネタンポ、おめえ、きょうは笛がうまく鳴んねえじゃあねえか」
ってね。そしたら、

「きょうは急いでおじやを出してくれられて、そのおじやをいただいてね、舌を焼いちゃった。それでうまく笛が吹けない」
というようなことをね、言ったって。

昔のことで、馬力やなにかがね、まあ、横浜あたりへ行っておそくなって帰ったときにね。おどり場のところが何だか騒がしいというので、のぞいてみたらそういうふうな猫が踊ってたっていう話なのですね。

(下土棚 金子元一氏 明治38年生 昭和50年5月)

「藤沢の民話第三集」

3-5 駒下駄おせん

吉岡芝原ってね、綾瀬町のね、小淵沢と落合の境の方の土地なんですけど、名前が吉岡芝原っていう原っぱがあった。そいで、これは、やっぱり綾瀬のね、お神楽を踊るお方がね、早川にあったわけで、それでまあ、よその祭りや何かに頼まれて帰りのことなんですね。

そこで、狐がね、娘に化けるわけだね、駒下駄をはいてね。そいで、そのお神楽師さんにあうんだね。神楽師さんが平太夫という名前だね。

「平太夫さん、あの、おせんがね、ちょっと用があります」
と、まあ、こういうことで。

「うんとよく、おじいちゃんよりもよっぽどね、上手う踊ってみせる」
と、まあ、いうようなことでね、踊り出したらしいんだね。

そいで、そのお神楽師さんが、お面をね、おかめとひよっとこのお面をふところに入れといて — その人は、かわり面が名人だったんですよ — 。

「ぬしがなあ、そんなになあ、踊ったって、おれのほうがおまえより踊りがうまいぞ」って、踊っちゃったら、とうとう狐が、そのおせんが、今度は化けたのが狐にあらわれちゃって、ちょこっと見てたらしんだね。

「そーれみろ、ぬしがな、おれを馬鹿にしようと思ってやったって、おれのほうがよっぽど上手だんべ」

ということでね。 そいでまあ、

「どうしても、どうもわたし負けましたから、そのお面をね、二つくれませんか。そのかわり、わたしの化かす宝珠のたまと取りかえましょう」

ということになって、それで、その人は取りかえてね、その、うちい戻って、その宝珠のたまを大神宮さんに上げちゃってね、いたわけだね。

ところが、こんどは、いくらやっても化けられなくなったらしいんだね。狐のほうか。だから、皆さんが

「見ろ、あの馬鹿狐を。あの、おかめとひょっとこのお面を。やれ、やれ、やっちまえ」って、いうようになっちゃったらしいだね。

で、結局、それからがね、どうしても化けることができないっていうんで、狐がね、夜の十二時半頃かね、戸を叩いて平太夫さんを起こすんだと。宝珠のたまを持っていかないとね、狐の仲間を外されちゃう、ということでね。まあ、じゃあというんでね。

「そのかわり、もうお宅は一生不自由ないようにね、通れるようにしますから」ということでね。まあ、やったらしいだね。「おれのほうでも、そのかわり一つ条件があるから。まあ、これは返してあげるけど、もう、人さまを化かしたりなんだりということはぜったいやめろ」それが条件でね。

それからは、狐が化かすといったことも、すくなくなっただですって。これはね、そんなに古くはねえんだね。明治初年ころの話なんですね。だってその平太夫っていうお神楽師さんは、わたしら子どもでも知ってますもの。踊りましたよ、わたしどもの方へ来て。

こういう話は、祭りの集会なんぞがあるときにね、お神楽を買いに行こうか、芝居にしようかというそういう時にね出てきたんですよ。平太夫、とにかく、かわり面が上手だからっていうようなね、話から出てきたわけだね。うちの親父さんなんかも結構話しましたよ。駒下駄おせんというね、人をだます狐がね、駒下駄の音を、いい音をさせてね、出てくるらしいんだね。実際に会ったことねえからわかんねえけど、たまになあ、そういうものが出てみりゃあいいけど、なんて若いうちはね、この話を聞くと聞いたものでした。わたしら青年になっても、お神楽を買いに行きました。綾瀬の早川ですよ。

(下土棚 金子元一氏 明治 38 年生 昭和 50 年 5 月)

「藤沢の民話第三集」

3-6 狐が月をあげる話

麦まきの時に、山の上へー、二間ばかり月をあげるんです。光のないお月さまをね。月のない日にですね。

「あれまあ、あそこへ月があがったよ」

って言うと、ポコンと落ちちまう、落ちたかと思うと、「きれいだったね」とほめるとまたあげる、そんなことがありました。

そういうときは狐がそばにいたってことはききました。

(下土棚 吉原セイさん 明治 27 年生 昭和 51 年 6 月)

「藤沢の民話第三集」

3-7 鐘ヶ淵

江戸時代のことである。ある年の夏、雨の降らない暑い日は何日も何日もつづいた。畑の作物は枯れ、川の水はへって田んぼはひび割れがした。

村人はたいへん困って天満宮にこもって雨乞いをしたが、いっこうに雨は降らなかった。それでこんどは、天満宮の鐘をみんなでかつぎ出し、引地川の淵に沈めて雨乞いをした。

その時からここを鐘ヶ淵と呼ぶようになったが、川底にはいまでも鐘が沈んでいると信じている人も多い。

「ふるさとマップ長後」

3-8 ムジナのお月さん

ムジナが木に登ってお月さんに化けて、お月さんにみせたって、そういう話がありました。

境川のふちにムジナがいたんですね。ムジナは榎の実を食べに木に登るんです。そのときに隣をくわえて上がった。人間をおどかすためにか、危害を与えられないようにね。それが月に見えるんでしょう。それを月といったのでしょうかね。

「ムジナがあすこへ月を上げたよ」って、よく言われてね、ムジナの月を見たものです。時季は秋、榎の実が入ったころですね。わたしが小学校四、五年生のころでした。

ムジナをかまうと、よく仇をする、人家へ来て戸をたたくっていいました。尾でたたくんですね。

それから、ジョーグチへ糞をしてにげていくんですね。榎の実などが出てるので、それとわかるのですよ。ムジナのためぐそといったものです。

(下高倉 塚越正治氏 明治 24 年生 昭和 49 年 7 月)

「藤沢の民話第二集」

3-8 セツ木村の伝説

長後町はずれ大庭庄に通ずる滝山街道の東側、小田急変電所南方一帯の地域を槐戸（サイカチド）と昔から呼ばれています。大昔この地に七本の槐古木が木戸のように立ちふさがっていたのでセツ木村の名が生まれたと伝えられています。

槐の木は字の示す通り、木辺に鬼がいるほどの、手のつけられないバラの木

で、如何に閉塞したくも誰一人切り倒す希望者がありませんでしたが、当時上高倉に住んでいた某氏が、勇気を奮ってとうとう全部切り倒して薪にした所、千束あったそうです。それから後に上高倉は七ツ木村から分かれて、千束村が独立したのだそうです。

またある人の話によると、大昔、今の戸塚区飯田町の金比羅様一帯の地域は、昼なお暗き大古木の密林で、モト木と呼ばれていました。それから北に続いて杉の木、十五石（ジュシュク）と境川に添って上高倉むかいまで続いていた大自在地帯だったそうです。

ところが、或る年の大嵐に下高倉へ境川を超えて七本の大古木が倒れこんで来たので、七ツ木村の名が生まれたと申します。

後に上高倉へ倒れこんだ大古木で薪が千束出来たので、七ツ木村から千束村が生まれたとも伝えられております。

「長後誌史」

3-9 狐っ火

ゆんべ飯田の方を見ていたら、狐っ火がなあ見えたんだ。赤い火でなあ、提灯のような丸みのあるやつがよう、次から次へと現れてなあ、そのうちに闇に消えちゃっただよ。「大川にはなあ、かつぱがいて、いつまでも水遊びをしないと、しりこだまだのひんぬかれるぞ」と親に言われたもんだ。

（下高倉 塚越正治氏 明治24年生 平成8年4月）

「季刊長後だより 107号」

3-10 燕や猫が十二支に入らぬわけ

二月十五日はお釈迦様の亡くなられた日でね、昔はよく大きなオヒョウゴができてて、それを掛けたんですよ。お釈迦様の臨終に、大勢のずいぶんたんの鳥だの獣だのがあつまってね。燕と猫だけでしたとよ、仲間になってねえのは。ほかの鳥や獣はみんな仲間になってたそうですね。

燕という鳥はね、お釈迦様が病気だって言ってもね、白粉つけたり紅つけたりしておしゃれをした、そういつてね、そしていまだに嘴とかどことかが、紅くなってるのかってね。

雀はもうなにもかもね投げ出して行っちゃった。みんなそのオヒョウゴにのってるけどね。目をちゃんとこうやっておさえてね、泣いてるの。お釈迦様がね、亡くなられたというので。

猫だけはねえ、「お釈迦が死んでもこちやかまわねえ」ってね、言っちゃった。それだからいまだに駄目なんだなんて。ほかの鳥や獣は、かわいがられるとかいう話ですけどね。それで猫は十二の仲間に入れられなかったんでしょね。

（下高倉 神山トクさん 明治22年 昭和49年6月）

（「藤沢の民話第二集」）

3-1-1 みみずの声と蛇の眼

昔、めめずは自分の眼と蛇の声と取りかえっこしたんですってね。「おめえはいい声だから取りかえよう」と言ってね、取りかえたとかってね。蛇は眼がなくてね、いい声だったから。

(下高倉 神山トクさん 明治22年 昭和49年6月)
(「藤沢の民話第三集」)

3-1-2 継子と蛇

飴屋が行くとね、他の子はおあしをもっちゃあ買いに来るんだけどね、その継子だけはいつでも手をね、手をしゃぶってるってね。かわいそうだからね、飴屋はいつも一本だけ飴をやっていくんですって。そして、ある日ね、いつもあの子が出てくるのに今日はいないってね、そこの家に行ってみたらね、そうしたら、桶の中へ蛇をいっぱい入れてね、その子もいっしょに入れてね、蛇にかませてるってね。

(下高倉 神山トクさん 明治22年 昭和49年6月)
(「藤沢の民話第二集」)

3-1-3 米と粃殻

奥さんが二度目だったんじゃないのかね。連れ子してきたわけなんでね、こっちにのこっている子どもさんより、自分の連れて来た子どもさんの方がかわいくて。ある時に、のこっている子どもさんが言うことをきいてくれないので、結局、俵の中に入れてしまうということから始まったことらしいんだけどね。自分の子供さんは、お米の俵の中に入れて、のこっていた継子さんは、粃殻の中に入れておいたところが、結局、自分のかわいい子どもさんが亡くなっちゃっていた。お米は冷えちゃうからね。粃殻の方が、あったかいからね。あんまりかわいいでやった結果が悪かったんですね。

(下土棚 金子元一氏 明治38年 昭和50年5月)
(「藤沢の民話第三集」)

3-1-4 灰の縄

昔は歳をとるとね、「働けないから、うば捨て山へ連れてってくれ、送ってくれ」って年寄りがね、言ったっていいますね。よく、うば捨て山といいますね。山深くね、そこへもってって、捨てられたんだって。

昔は、殿様に税金を納めるのに物納で米なんだがね、それを納めるのが大へんだというんで、いろいろしたところがあるわけなんだね。殿様が「灰で縄をなってい」ってね。「それを持ってくれば税を下げてる」というようなことでね。

そうしたときに、どうしたらいいかってね、いよいよ訪ねて行ったんだね。山へね。山へ訪ねて行っておじいさんにきいたらば「それじゃあね、縄をなって、それを燃やしなさい。そっくり残るように燃やしなさい。そうすれば、そっくり残るから、それを盆のようなものにでも盛って行けば、それが灰で縄をなったと

同じものになるから」と教えてくれた。

そのとおりにしたところ、それからというもの、大へん税金も安くなって、あるいは廃せられたと。それで、大へん考えたというんで、どこで聞いたって殿様が言ったら、ここだと言うんだね。これは、年寄りは大それたということだね、こんどは年寄りを捨ててはならんということをね、殿様も気がつかれて、それで、うば捨て山に捨てないことにしたんだって。

(下高倉 塚越正治氏 明治24年生 昭和49年7月)
(「藤沢の民話第二集」)

3-15 こんぺい糖

坊さんにね、「このこんぺい糖はね、食べると死んじゃうから食っちゃいけねえ」ってね、ことわられたんですよ。

そしてね、食べたくてしょうがないからね、お庭の掃除をしてね、植木鉢をこわしてね、そして、「こうやって寝て、こんぺい糖をまあ、食べると死んでしまうと言われたからね、一生懸命こんぺい糖を食べたけど死なれません」て、言ったってね。

(下高倉 神山トクさん 明治22年 昭和49年6月)
(「藤沢の民話第二集」)

3-16 くわんくわん

よそからお彼岸にぼた餅をもらって、たくさん阿弥陀様へ上げるわねえ」。それをね、小僧が上げてね、そして、食べたくてしょうがなくてね、まあみんな食べちゃたんですよ。

そうするとね、坊さんが「さっきのぼた餅はどうした」ってね、言われたとき。そしたらね、「阿弥陀さんが、みんな一つなしに食べてしまわれました」ってね、「嘘と言うなら和尚さん行ってごらんなさい」ってね。小僧は、阿弥陀さんの口のまわりへ、餡をいっぱいなすりつけておいたってね。それで、「嘘だと言うなら口のまわりをごらんなさい」って言ったんですよ。「それでも、嘘だと言われりゃあ、頭を一つ張ってみましょう」ってね、阿弥陀さんの頭を張ったら、クワンクワンと鳴ったてね。「ほらごらんなさい。このとおり食わん食わんて言われる」ってね。

(下高倉 神山トクさん 明治22年 昭和49年6月)
(「藤沢の民話第二集」)

3-17 西行とおかみさん

西行さんの歌はね、はじめは同じで、下の句だけ変えられたらしいんだね。おかしな歌ばかりでね。おかみさんがね、女の子におしっこをさせてたところをね、まあ、そのお坊さんが通ったらしいんですね。そしてね、いかなる旅もしてみたが、下の方へその、手ぶたをしたってねえ、それが、やっぱり歌になってるらしいんだけどね。女の子の下の方を隠なしたらしいんですね。

(下高倉 神山トク氏 明治22年 昭和49年6月)
(「藤沢の民話第二集」)

3-18 大庭のマラゲンさん

昔ね、大庭にマラゲンてのがあった。大庭の道のふちの田んぼで草を取っておったって。あんまり大きくてね、後ろの方へまわしてね、そうして、こうやるでしょ、背負ったように見えるでしょう。通行人がね、「ゲンさん、あんたまあ、そんなね、お小さいのおぶって、まあ、よく田の草をお取りになりますね」「いや、どうもありがとうございます。実はね、大きくって困っているんです」。

(下高倉 塚越正治氏 明治24年生 昭和49年7月)
(「藤沢の民話第二集」)

3-19 嫁さんの屁

お嫁さんが、お姑さんと二人でね、針仕事をしててね、顔色が悪くなってね、おっ母さんのほうがたずねられたんですってねえ。

そうしたら、その、こういうことのまあ、だけど、がまんしていますってね。そんなことに遠慮なんてしなくっていいと言われたんだね、そうしたら、おっ母さんの前でまあ、おっ母さんを吹き上げちまったっていつてね、それで、おっ母さんが愛想がつきたってね。

(下高倉 神山トク氏 明治22年 昭和49年6月)
(「藤沢の民話第二集」)

3-20 葛原の不動さま

葛原の不動さんは、前には池に沈んでられてね。ある時、そのそばを目のいい人が通ったらね、池でその人の名が聞こえるんですって。呼ぶんだってね。それでね、池のふちに立って、きょろきょろどこを見ても人がいないんで、「どうもこの池の下の方らしい」ってのぞいたら、ピカッと光ったんですって。ピカリピカリ見えただって。そんでね、揚げてみたら不動さまだった。

それを揚げたのは、今の小泉喜助さんという家のおじいさんで、ですからお祭りの時にはね、喜助さんで家で、もう、代は幾代に変わっているかしんねえけど、かならずおすわりの大きいのをね、いつでも上げられるって。

(下土棚 広田きん氏 明治18年生 昭和48年9月)
(「藤沢の民話第二集」)

3-21 信心もほどほどに

おちかさんという娘がね、まだ学校へ上がっている時分でしたが、いなくなっただんですよ。狐に化かされてね。

豆をふところに入れて食べていたらしいんですね。その豆が欲しさに狐がついて来たんですねえ。

近いところで無尽をやっていて、人がおおぜい寄っていたので、大騒ぎして探したんですけどね、なかなかめっからないでねえ。お夕飯がすんで、よっぽどたってから、これから川を探すだけってときにね、おちかさんのお祖父さんの家のね、イナブラの陰からふらふらと出てきてねえ。お祖父さんて人は、おちかさん

の家の隣に住んでいて、お稲荷さんを一人で信心していたんですよ、豊川稲荷をね。

お稲荷さんというものは、狐がお使いめをするんだから、信心もほどほどにしないと、あんまり良くないってね。

(下高倉 神山トク氏 明治22年 昭和49年6月)

(「藤沢の民話第二集」)

3-22 狐に呼ばれたジョーさん

中和泉ってところに、ジョーさんという息子があつたんですってねえ。そっして、狐がねえ、そこへきちゃあね、「ジョーさんジョーさん」って呼ぶんでっすって。お寺がすぐそばにあるんでね、尻尾でボサンボサンて戸をたたいてね、そのお寺の坊さんと呼ぶんだねえ。「ジョーさん、ボさん、ジョーさん、ボさん」てね、呼んだとかってね。尻尾をボサンてやるのは坊さんのことだってね。ジョーさんと坊さんとね、いっしょに呼ぶんだなんていってね。

(下高倉 神山トク氏 明治22年 昭和49年6月)

(「藤沢の民話第二集」)

3-23 狐にトンビを裂かれた話

私の父が、よそのお嫁さんを仲人してね、引き出物のお魚をいただいてきたんでしょ。それを風呂敷で背負って、その上へ、いまのマントみたいなトンビを羽織って、大通りの土手のきわを歩いてたんですね。

自分では重くもなんともなかったけど、土手を離れて、ひょいと道の真ん中へ行ったらね、トンビがビーッとひっちゃばけたってねえ。ずいぶんびっくりしたって。

狐がね、土手にいて、魚を取ろうとしてたのが、ひょいと土手を離れたので、肩が咬みあつたらしくてね、魚はとられなかったけど、家に帰ってみたらトンビが、サッと裂けてたんだって。

(下土棚 広田きん氏 明治18年生 昭和48年9月)

(「藤沢の民話第二集」)

3-24 松の木の光もの

川のむこうの飯田へ嫁に行った者があつたんですよ。自分はそのお供でついていったんですが、弟がそれを見に行こうと思って橋を渡って行くと、先のほうに提灯をつけてさっさと歩いて行く人があつたそうです。あの人に追いつくべえと思って急いで行って、追いついたと思ったら、その人はいなくなっちゃた。不思議に思って向こうの方を見ると、いま、団地になったあたりに藤塚山という山があつたんですが、その山の松の木の上でポーッと青い光ものがしている。人魂のようだったので、肝をつぶして、あわててそのまま家に帰ってきてしまった、というんですね。

狐っ火というのは、昔、狐、狸、モジナなどが骨をくわえて木に登っているか

ら光るのだと言いましてね、松の木のウラなどでチカリチカリとやっていることがよくあったものですよ。狐が火を吹くというのではないらしい。

(下高倉 神山金治氏 大正 2 年生 昭和 49 年 5 月)
(「藤沢の民話第二集」)

3-25 河童が化ける話

河童はやっぱし化けているんだからね、ただ見たところじゃまあ、蛙みたいなかっこうのものだってね、亀に似ているとかいってねえ。

化けて、いろいろなものになるんですってね、同じものじゃなくて、いろいろなものになるのですよ。川のふちを歩いていると、自分がこういうものが欲しいと思うと、その欲しいものに見せかけるって。頭へさす櫛が欲しいと思うとね、櫛のように見せてね、そして、こう、ふわふわしてるってね。それを取ろうとすると引っ張りこまれちゃうってね。

(下高倉 神山トク氏 明治 22 年 昭和 49 年 6 月)
(「藤沢の民話第二集」)

3-26 仏さまへ入った火の玉

私の子供が、小学校 2 年のときに、病気で寝ておりましたらね、「このくらいの火の玉がすーっと、あたいの足の方を通して仏さまへ入ったよ」って、こう言うんです。だから、ぞくぞくってしちゃって、気味が悪かったんです。

そうしましたらね、しばらくたって、お祖母ちゃんの実家の葛原の家からね、戦死の知らせが来ましてって、お話がありましたんです。そしてね、火の玉がすーっと仏さまへ入った日と、戦死なすった日と同じなんです。ですから、ずいぶん不思議なことがあるもんだとおもいましたね。

上海事変で亡くなったのですが、娘は戦死した人をぜんぜん知らないんです。

(下土棚 広田ソノ氏 明治 42 年年生 昭和 48 年 9 月)
(「藤沢の民話第二集」)

3-27 おぼすて山

桜ヶ丘と大和の間ですが、桜っ株と大和の間に三の塚というのがあったんですよ。その間にあった山がおぼすて山で。昔、そこに、姥が住んでたんだよってことでね。姥が住んでいたというだけの話ですけど、そんな話があるんですね。

(高倉 渡貫わか氏 大正 3 年生 昭和 50 年 6 月)
(「藤沢の民話第三集」)

3-28 あわて者

このむこうの下和泉の人だっていったねえ。そのう、亭主が小ちゃかったんでしょ。女の方がでかくって。それで、おかあちゃんが、畑へ茄子を取りい行くときにね、その、子どもだと思っておぶったら、亭主がおぶつあってちゃった。それから、茄子をつかんでとろうとしたらね、「そりゃタネ茄子だ、とっちゃい

けねえ。そりゃ俺のだいじなものだ」って言ったのでね、聞いてみたら自分の亭主だったって。

(下高倉 岩崎角保 明治 43 年生 昭和 50 年 3 月)
(「藤沢の民話第三集」)

3-29 菖蒲を屋根にさすわけ

昔、三韓征伐のときにね、神功皇后が妊娠していられて、戦が終わってこっちへ渡ったときに、お産になっちゃったんだね。ちょうど五月で、あやめも咲いてたしね。菖蒲がたくさん出ているところで、お産になっちゃってね、まあ、菖蒲を寝ぎぬのかわりにお使いになった。ということを知っていますね。

菖蒲を屋根にさすってことは、まあ、それが、そのときの屋根代わりみたいなぐあいにもなった習わしでね。それからね、三韓征伐でね、勝負をして勝てたんでね、それで菖蒲をつかうんだって。そういうふうにお祖父さんから聞いてましたね。

(下土棚 金子元一氏 明治 38 年生)
(「藤沢の民話第三集」)

4 長後の民謡・わらべ唄・遊び唄

4-1 糸とり歌

- 一 糸とり女とナーヨ道中の犬はよ
菓子や饅頭でナだまされるヨー
- 一 来なヨ毎晩ナーヨ立たせちゃおかぬヨー
タマにやまごまごさせてやるヨー
- 一 糸とりやブタだとナーヨケチっておいでヨ
色情（イロ）にもつからナアきがしれぬヨー
(大正六年)

「大山街道繁盛記」

4-2 白ひき唄

「ハァー白のまわるよに 仕事がまわりや
地しばり畠も 苦にゃならん
ハァー白のまわるよに 仕事がまわりや
倉もたてましよ ななとまい
ハァー白はひきたかないのだが お顔みたさの
はかりごと
ハァー歌え歌えと せめかけられて 歌も出ないよ
玉のあせ」

「ふるさとの風土物語」

4-3 糸引き唄

糸は正直だよむらから切れる
むらが無ければ切れはせぬ
糸や切れるな座繰よまわれ
晩にしまいがおそくなる

「羽根沢資料館」

4-4 長後音頭 ①

- 1, 相州長後はなー 相州長後にゃ名所がござる
ヤッコラサノサ
お富士 仙元 天神社 ソコ ソコ ソコ 天神社
- 2, 八里橋なしなー 八里橋なし滝山街道
ヤッコラサノサ
なかをとりもつ長後町 ソコ ソコ ソコ 長後町
- 3, ままになるならなー ままになるなら長後の町で
ヤッコラサノサ
主と二人のわび住まい ソコ ソコ ソコ わび住まい

昭和10年(1935)頃の長後には製糸工場が多数あって、ついたち、15日の工場の休日ともなると、女工さん達が町にどっと繰り出しました。近郷近在から若い衆も集まり、繭の出荷で懐も暖かい人達で大変な賑わいでした。「かどや」「持田屋」「みよしや」などの旅館、料亭、カフェからは楽しげな声が夜遅くまで聞こえました。当時は今の青果市場のあたりに芸者置屋があり、6人の芸者さんがいました。

この賑わいの中で、尚奨会(商興会の全身)の人達から「長後にも唄があったら」と声が上がりました。歌詞は皆で作り、曲は専門家につけてもらい、ガリ版刷りの歌詞を配り、町に流行らせていきました。横浜銀行駐車場になっているあたりに、繭の乾燥場があり、そこで時々行われた素人芝居にはこの「長後音頭」が芸者さん達により披露されました。当時、芝居を見に行ったという安藤みね子さんは「覚えやすいメロディだからか、すぐに2番まで覚えました」と話されました。

昭和12年(1937)尚奨会が音頭をとり、出征兵士(日中戦争)を送る壮行会のために楽隊を作ることになりました。伊勢丹に太鼓やラッパを買いに行った時、デパートの宣伝のためか、レコードの吹込みをしていました。渡りに船と「長後音頭」を吹込み、裏面には「都々逸」を入れました。こうして、偶然にたった一枚のレコードが出来上がりました。

その頃、藤沢にラッパの上手な紙芝居屋さんがいるのを知り、その人を先生に招き、「豊仙会館」で夜遅くまで楽隊の練習をしました。やっと「君が代」が演奏出来るようになったところで、メンバーに召集令状が届き、楽隊もそれきりになってしまいました。

「召集されたメンバーと元気に会える日を願いながら、そのレコードは親戚の桐ヶ谷さんが大切に保管しています」と久我純正さんは話されました。

「季刊長後だより 35号」昭和53年1月10日

4-5 長後音頭 ②

作詞 長後三業組合

作曲 町田 嘉章

相州長後はナアー サテヨイ サテヨイ サテヨイ

相州長後で名高いものは ヤッコラサノサ

渋谷判官 城の跡

トコ ソコ ソコ 城の跡

八里橋ならナアー サテヨイ サテヨイ サテヨイ

八里橋なら滝山街道 ヤッコラサノサ

中を取り持つ 長後町

トコ ソコ ソコ 長後町

長後不動さんはナア サテヨイ サテヨイ サテヨイ

長後不動さんは 親切ものよ ヤッコラサノサ

とても逢ふ瀬の 道しるべ

トコ ソコ ソコ 道しるべ

長後小唄はナア サテヨイ サテヨイ サテヨイ

長後小唄は 蠶の音頭 ヤッコラサノサ

繭になるまで 踊りぬく

トコ ソコ ソコ 踊りぬく

蠶どころのナア サテヨイ サテヨイ サテヨイ

蠶どころの あの煙も ヤッコラサノサ

上る煙りは 長後町

トコ ソコ ソコ 長後町

長後よいとこナア サテヨイ サテヨイ サテヨイ

長後よいとこ 住みよい町よ ヤッコラサノサ

住めば心地の よい町よ

トコ ソコ ソコ よい町よ

「郷土の民謡小唄集」歌の武・相・豆

横浜貿易新報社編 昭和11年（1936）発行

4-6 長後音頭 ③

作詞 作曲 不詳

補作 ホープスターズ講師 畠山重信

唄と音曲 芳村君男とその社中

製作 監修 ホープスターズ代表 宮崎和雄

振付原形 月宮流家元月宮かほる

振付構成 ホープスターズ

相州長後はネエー 相州長後は
名所の揃い ヤットサノサァー
お富士仙元 天神社 ソコ ショコショコ 天神社
アラヨイトサノサァー

嫁をとるならネエー 嫁をとるなら
長後の娘 ヤットサノサァー
気立てやさしく 器量よし ソコ ショコショコ 器量よし
アラヨイトサノサァー

八里橋なしネエー 八里橋なし
滝山街道 ヤットサノサァー
仲を取り持つ 長後町 ソコ ショコショコ 長後町
アラヨイトサノサァー

香り漂うネエー 香り漂う
有の実の里 ヤットサノサァー
味は自慢で 出来の良さ ソコ ショコショコ 出来の良さ
アラヨイトサノサァー

引地境のネエー 引地境の
川筋沿えで ヤットサノサァー
人情豊かな 長後町 ソコ ショコショコ 長後町
アラヨイトサノサァー

高齢者を対象にした5つの健康体操教室が会員相互の交流と親睦を深めるために月1回の連合教室がつくられた。名称はホープスターズ、代表に宮崎和雄さん、体育講師に畠山重信さん、会員数150名で発足した。「長後まつり」での民謡踊り参加をきっかけに体育祭、「ふるさとまつり」などに出演するようになった。しかし、民謡の曲は他地区のものばかり、地元のものはないかとの声が出た。会員の山田アキさんが60～70年前に歌われていた「長後音頭」を思い出して口ずさんだ。詞や曲の作者は不詳だったが一、三番の詞は小菅善次郎さんなどの協力ではっきりし、二、四、五番は畠山さんが現代を映して補作した。唄と音

曲は地元の民謡の先生芳村君男さん（CBS ソニーレコード専属）、踊りの振付は踊りの師匠月宮かほるさん（月宮流家元）に依頼した。

（「長後だより」平成3年3月10日号宮崎和雄さん寄稿の要約）

4－7 お手玉遊びの唄

おさあらい

おひとつ おひとつ

おひとつ さらって おさあらい

おふたつ おふたつ

おふたつ さらって おさあらい

おみいつ おみいつ

おみいつ さらって おさあらい

・・・・・・・・

おみーんな おみーんな

おみーんな さらって おさあらい

さいりょうざん

さいりょうざん きりふかし

ちくまのかわは なみあらし

はるかに きこゆる ものおとは

さかまくみずか つわものか

の一ぼる あさひに はたのての

きらめく ひまに くる くる くる

・・・・・・・・

「上高倉のむかし」

4－8 羽根つきの唄

ひとりきな ふたりきな

ひとりきな ふたりきな

三人目には よってきな

いつ来ても むづかしい

ななこの帯と やのじにしめて

ここの前は とおしやせぬ

4－9 大山街道

一つ 二つ おんみんな 大山街道 とぶ鳥は

はねが十六 目が一つ

一の木 二の木 三の木桜 五葉松柳

柳の下で 女郎と殿と 髪ゆって参る

どこえ参る 信濃へ参る
信濃の道で 日が暮れてしまつて
一本松に 火をつけて つけても つけても 明るくねえ
向うの障子を 切りあけて
お馬が三匹 とび出した そのお馬の 言うことにや
ぜぜ三文拾つて一文で 酔買って 二文で 女房 女房は誰よ
大黒屋のお菊 きくきく 針箱
おん鳥 めん鳥 巣作れ コケコッコウ
「上高倉のむかし」

担当：清水茂代